

【資料】

中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系―名詞節内にモダリティ形式が生起することをどう解釈するか―

実践女子大学文学部

福嶋 健伸

資料一 先行研究がどこまで明らかにしているか

柳田一九九一の指摘をまとめると、次のようになる。

(1) 中世末期日本語のくテイルは、既然態と進行態を表せる。

ア 西もんに立ている (虎明本・警女座頭)

イ つれほしうて是にやすらふていまらした (虎明本・餅酒)

(2) 当時のくテイルの主格名詞句は、有生物に限られる。

ウ 石ガ出テイル (×) ※坪井一九七六にも指摘有り。

エ その風呂屋の前に鋭な石が一つ出てあつたが、出入りの人の足を傷り、 (天草伊曾保・四二七頁)

また、高山一九九五によって、次のような、文末で、現在の状態を表しているくタの存在が指摘されており、このようなくタは、既然態を表すとされている。

(3) 当時のくタは文末で既然態を表せる。

オ あのみみのきつとしたは、其まま女共が耳ににた、又あの目のくるとしたもにたよ「自分の妻の顔と似ている鬼瓦を見ながらの発話」 (虎明本・鬼瓦)

カ しらぬものにごとばをかくるものか、しつた「私はあなた
のことを知っている」
(虎明本・磁石)

これらの例は、現代日本語で解釈する場合、「似ている」「知っている」のように現在の状態として解釈されるだろう。現代日本語のくたにはない特徴である。

資料二 くテイルとくタの例

(4) 当時のくテイルは、全体として存在文に近い。

キ 河尻に源氏どもが多う浮うでいまらす

(天草版平家物語)

ク いや是に一のたなとおほしき所に、女がまいついでいるよ、

(虎明本・連尺)

ケ 何としてひつこふでいたぞ

(虎明本・武悪)

(5) 当時のくタは、全体として存在文から遠い。

コ いやさいぜんから某ばかりもつた、又おぬしもたしめ
「さつきから自分ばかりが手紙を持たされているので二郎
冠者が不満を述べている」
(文荷)

サ この人形は、さい人の作物に似た、「罪人の作り物に似て

いる人形(実は人形ではなく本物の人間)を見ての発話」

(瓜盗人)

シ 某がしう句にすひたと云事は、どこできひたぞ「私が秀句
好きということはどこで聞いたのだと質問している」

(薩摩守)

ス それ左の手があいたは「大名が、昆布売の左手があいてい
ると指摘する場面」

(昆布売)

セ 物うちからうへへは、くわつくわつとみだれた「田舎者が
自分の刀の焼目を描写している場面」

(長光)

次のような存在文的な例は、わずかに五例のみである。

ソ うたにはよまぬと云、うたにのつたとあど云て

(虎明本・土筆)

タ 「重盛が」門の内えさし入ってみられるれば、(略) 一門の人々
(略) 中門の廊に二行に着座せられた。

(天草版平家物語)

チ 「自分が」まだ、この世にながらえたと知らせたうわ思われ
たれども、

(天草版平家物語)

ツ ふるはが二三まいのこつた

(虎明本・鞍馬参)

テ されはこそ天照大神もないくうげくうとたたせられた

(醒睡笑・巻四)

(6) くタとくテイルは相補分布に近い。

くタ 知る (17例)、似る (14例)、持つ (12例)

くテイル 持つ (1例)

資料三 くテイルと動詞基本形の例

(7) くテイルの例

ト よびにやつて参るあひだまつていまらした

(虎明本・呼声)

ナ つれほしうて是にやすらふていまらした

(虎明本・餅酒)

ニ 我がまだ生きて居るうちに、別の妻をば

(天草伊曾保・四二五頁)

ヌ 「太郎冠者が独り言を言っているのを主人が見つける」

むざとしたる事を、ひとり事に云ている、

ネ 親子三人念仏していたところに

(天草平家・一〇四頁)

(8) 動詞基本形の例

ノ されはこそ竹の子をおるよな、 (虎明本・竹の子)

ハ あらきどくや、おくびやうなやつじやがきどくに夜まはり
をするよ、 (虎明本・杭か人か)

ヒ おとのするをけると云て (虎明本・鞆座頭)

フ いや太郎くわじやをせつかん致す (虎明本・鐘の音)

ヘ 「雨は降るか、降らぬか」と問ふ時、田夫のむすこ見てい
ふ、 ※鍵括弧は福嶋 (醒睡笑・巻五)

ホ 田夫鳥をうつ折節隣郷の百姓とをり合せ「是は何をまくぞ」
と云に(略)己れか調子をひきく「大豆をまく鳩か聞く程
に」 ※鍵括弧は福嶋 (醒睡笑・巻六)

マ 「山伏が柿を盗み食いしている所を見回りに来た柿主が見
つけて」言語道断の事、いかめの山ぶしが、かきをとつて
たぶる、何とがないたさう (虎明本・柿山伏)

ミ 水かくる内、女出て、なふかなしや、何といふぞ、
(虎明本・水掛簪)

ム ぶたい一反おいまはる内に、ちう人いでて、
(虎明本・吃り)

メひやうしにかかつてうつ内に、かたなをみせぬやうにいだす
 (虎明本・宝の槌)

(9) くウチ (三) 節の用例比

さらにウチ (三) 節の節述語に見られる用例数の比について、現代日本語の調査(※)と対照させて示すと、次のようになっている。比率がほぼ逆転しており、分布に大きな違いが見られることは明らかだろう。

中世末期日本語	くテイル 四例	動詞基本形 六二例	くテイル・動詞基本形 約一〇一六
現代日本語	一一二例	九例	約一二一

(※)『CD-ROM 版 新潮文庫の100冊』の中の一九四〇年以降に生まれた日本人作家(赤川次郎、沢木耕太郎、椎名誠、高野悦子、藤原正彦、宮本輝、村上春樹)の作品全てを現代日本語の資料とした。

資料四 動詞基本形とくウ・くウズ(ル)の例

1 中世末期日本語の動詞基本形の比

『天草版伊曾保物語』『天草版平家物語』『狂言台本虎明本』『天理本狂言六義』を調査した結果、次のような未来を表す動詞基本形の例は、106例(ただし、確例55例)であった。

モ 汝は各のかたへゆき、かれい(嘉例)のことく、今日松はやしをいたす程に、ござつてくだされひといふて、よびまらしてこひ
 (虎明本・松脂)

ヤ 是からすぐに行程に、跡のめこどもの事たのむ
 (虎明本・武恵)

ユ 「仏御前が」一番舞う(mō)ほどに鼓打ちを呼べ
 (天草平家・九六頁)

一方、次のような例は、693例もあった。

ヨ 敵に馬の腹を射られてしきりにはぬる(ま)によつて、「有国が」弓杖をつけてをりたつて、
 (天草平家・一六九頁)

ラ 「夫が」因幡堂のお薬師へ、籠つたと申ほどに、参つて、見まらせうと存る
 (天理本・因幡堂)

リ 「獅子が」声をあげて叫ぶほどに、件の鼠が聞き付けて、
 (天草伊曾保・四五二頁)

なお、現代日本語の調査(※)では、次の例のような未来の例は、44例であった。

(参考例) 俺、シャワーあびてでかけるから (東京タワー)

次の例のような非未来の例は、31例であった。

(参考例) お腹、痛いていうから、見舞いに (笑う招き猫)

※一九六〇年以降に生まれた東京都出身の作家の作品を調査した。高野和明著『13階段』(講談社)、乃南アサ著『凍える牙』(新潮社)、山本幸久著『笑う招き猫』(集英社)、江國香織著『東京タワー』(マガジンハウス)

(1) 中世末期日本語の〜ウ・〜ウズ(ル)の例

次のような未来を表す例が、標準的である。このような例は、230例であり、同一環境中の〜ウ・〜ウズ(ル)の実に97%がこのよう
な使われ方をしている。

ル お供申まらせうずるほどに、お拵へをなされいと、申さるゝ

レ おさしきへもつていでまらせう所で、上に御さるおしうは、
一つ宛とらせられうず (天理本・素襖落) (虎明本・栗焼)

なお、現代日本語の調査(※)では、次の例のような未来の出来事を表す例は、たったの2例のみである(動詞基本形は44例ある)。

(参考例) 十年後には価値があがるだらうから、ちゃんととつとけよ (笑う招き猫)

(参考例) そこでうつぶせになつて寝てるだけになるだらうから (笑う招き猫)

資料五 体系のまとめ

中世末期日本語と現代日本語の各形式の分布

現代日本語	中世末期日本語	未来(以後)	現在(同時)
動詞基本形	〜ウ・〜ウズ(ル) / 動詞基本形	動詞基本形 / 〜テイ ル / 〜タ	〜テイ

〔引用文献〕

安平鎬・福嶋健伸二〇〇五「中世末期日本語と現代韓国語のテンス・アスペクト体系―存在型アスペクト形式の文法化の度合い―」日本語学会（旧称：国語学会）『日本語の研究』一・三（『国語学』通卷二二二号）

岩崎卓一九九四「ノデ節、カラ節のテンスについて」『国語学』一七九

奥田靖雄一九七八「アスペクトの研究をめぐって（上）（下）」『教育国語』五三、五四

鈴木 泰一九九二『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の

分析―』（ひつじ書房）

坪井美樹一九七六「近世のテイルとテアル」『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』表現社

高山百合子一九九五「大蔵流虎明本・虎寛本に見るアスペクト表現―存続を表す助動詞「た」をめぐって―」筑紫女学園短期大学『筑紫国文』一八

福嶋健伸二〇〇二「中世末期日本語のくタについて―終止法で状態を表している場合を中心に―」京都大学『國語國文』七一・八

福嶋健伸二〇〇四「中世末期日本語のくテイル・くテアルと動詞基本形」

東京大学『國語と國文學』八一・二

福嶋健伸二〇一― a 「中世末期日本語のくウ・くウズ（ル）と動詞基本形―くテイルを含めた体系的視点からの考察―」京都大学『國語國文』八〇・三

福嶋健伸二〇一― b 「くテイルの成立とその発達」『日本語文法史研究の

最前線』くろしお出版

堀江薫二〇一―「主節現象」と「従属節の主節化」から見た日本語の特徴…他言語との比較を通じて」『日本語文法学会第12回大会発表予稿集』

柳田征司一九九一『室町時代語資料による基本語詞の研究』（武蔵野書

院）

《中世末期日本語の調査資料》「天草伊曾保、天草平家のページ数は底本のものである。また、用例等を示す場合、表記を変えている場合がある。

なお、調査・考察にあたっては、ロドリゲス『日本大文典』（土井忠生訳『日本大文典』三省堂、一九五五年）を参考にした」

・京都大学文学部国語学国文学研究室編『文禄二年耶蘇会板伊曾保物語本文・翻字・解題・索引』京都大学国文学会

・江口正弘著『天草版平家物語対照本文及び総索引（本文篇）』明治書院

・池田廣司、北原保雄著『大蔵虎明本狂言集の研究』上中下巻、表現社

・北原保雄、小林賢次著『狂言六義全注』勉誠社

・岩淵匡 他編『醒睡笑静嘉堂文庫蔵本文編』笠間書院

・小高敏郎 校注『江戸笑話集』（きふはけふの物語）・日本古典文学大系、岩波書店

[付記] 従属節の独立度の議論に関しては、矢島正浩先生（愛知教育大学）

と橋本修先生（筑波大学）より貴重なご意見を頂いている。記して感謝申し上げます。当然、本稿の不備は、全て筆者の責任によるものである。

なお、本稿は、科学研究費補助金及び科学研究費助成事業（研究課題 日本語のテンス・アスペクト体系の変遷に関する研究／中世末期 日本語のテンス・アスペクト・モダリティに関する記述的研究／近代日本語におけるテンス・アスペクト・モダリティ形式の変遷に関する記述的研究／近代日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷に関する言語類型論的研究、課題番号 16720110／18720124／20720124／24720210 全て若手研究B、研究代表者 福嶋健伸）の研究成果の一部を含んでいる。